ぐみちゃん、どんぐりちゃんたち、0、1、2 歳児の保育過程、ちょこっと解説

2024 年度版

・・・木の花暮らしでの育ちの道すじ　未満児版・・・

プロローグ・・・・未満児時代はゆっくり育って、内なる豊かさを拡げる！

無知な赤ちゃんから賢い赤ちゃんへ・・・・。脳科学の進展に伴い、最新の「赤ちゃん学」（注 1）が明らかにしてきたのは、生まれたばかりの赤ちゃんは目が見えない、赤ちゃんの脳は真っ白ななんにも描かれていない板のようなもの・・・という従来の「赤ちゃん」像を塗り変えるような、ひとを見極める認知や模倣によるコミュニケーション、あるいは数の概念の認識…等々「賢い」赤ちゃんという知見の数々です。IT と AI の融合する高度情報社会のスピード感さながらに、多言語習得など乳児からの超早期教育などももてはやされますが、その弊害も多く指摘されるところ。必要な発達の順序性、臨界性（敏感時期）をしっかり押さえて、豊かな可能性をつぶさないようにしたいものです。赤ちゃんって、大人が思うほど軟弱な存在ではなく、主体的な能力を多様にいっぱい秘めているようです。大人の思い通りになる存在と決めつけず、幼児期の段階以前のこどもの姿をしっかりと見つめ、その生きる力の多様で無限の可能性をお家の方と一緒に楽しんで探していければ、と思っています。「ぐみぐみ」で過ごす短い時間が、後々の成長の大きな礎となるように・・・。

（注）「赤ちゃん学」・・・小児科学、発達心理学、発達神経学、脳科学、教育学、保育学、物理学、ロボット工学、倫理学などさまざまな視点で、人間の起点である赤ちゃんを研究する異分野融合型の新しい学問領域。対象は幅広く、赤ちゃんの運動、認知、感覚、言語などの各機能、社会性の発達プロセスとその障害のメカニズムの解明、ヒトの心の発達、胎児や乳幼児の人権にまで及び、赤ちゃんの発達を科学的に解明しようとする新しい学問分野。2001 年に「日本赤ちゃん学会」が設立され、小児科学、発達認知心理学、発達神経学、脳科学、教育学、保育学、物理学、ロボット工学などの異分野が連携・融合した研究が進められています。

幼児期とも異なる 0，1 歳特有の世界・・・

家庭の中でお家の方々との基本的な信頼関係のもとに築く中で、自他の関係を理解し、環境への働きかけを主体的に行い始める生後半年以降の赤ちゃん。そして母乳から離乳食へ、ハイハイからつかまり立ち、二足歩行へ。喃語から初語、発話へ・・・等々心身の全面的な発達が大きくみられる中で、「安心」の基地（親子関係）を土台に環境への働きかけが盛んになる時期での入園になります。

幼保連携型認定子ども園となり、こうした 0 歳児（木の花では 9 ヶ月以降）からの入園が可能になりました。人見知りが始まっている時期です。まずは家庭という基地（お父さん、お母さんとそこでのお家）への代替となるような、未満児保育担当スタッフとの信頼関係を未満児棟（ぐみぐみはうす）での生活を通じて徐々に作っていきたい、と考えます。そのうえで一人一人の赤ちゃんを単に世話する、という位置づけではなく、ミルクや離乳食などの食生活、睡眠、そして遊び…というリズムのある規則的な安心・安定感のある生活を通じて、健康的な育ちを土台に、「賢い赤ちゃん」が何に興味関心を覚えてどう行動するのか？（賢さを発揮するのか？）周囲の環境と先ずは身の回りの人（大人やぐみの他児たち）への働きかけはどのようなものか？見極めていきたい、と考えています。

幼児期と異なる発達過程にある 3 歳未満児。とりわけ 0、1 歳は聴覚の発達も音を取捨選択できる、音源が特定できる幼児期以降の発達年齢とも大いに異なる未満児の時代。なので静けさのある音環境は重要な発達刺激に関わ

る構成要素。なので、ぐみぐみはうすは音環境にも配慮し、静けさのある落ち着いた生活空間として構造、建材などに考慮しました。モノをたたく、落とす、投げる・・・。一見困ったような行動ですが、周囲の環境から世界を理解しようとする様々な実験、探索の行動様式。「もう一回」と繰り返し没頭する反復作業、一人一人の世界が存分に堪能できる環境を用意し、五感をたっぷり働かせる遊びと生活の場を創りたいと思います。（だからスタート段階でごっそりと遊具教材等はあえて用意してありません。）

１歳児にとっても先ずは新たな居場所としてのぐみの生活での安心・安定を保障するためにぐみ棟を用意し、個別対応での大人と共に自ら安心・安定感を掴み取るまでの時間を大事に考えています。０歳児よりも行動半径が拡がる１歳児は、ぐみ棟の１階、２階、ときには階段、ベランダ、屋上なども活用できるようにぐみ棟の環境とスタッフ配置を考えていきます。

ぐみぐみはうすを基地に家庭とはまた違うぐみぐみはうす＋園庭、時には本園などの環境へ主体的に働きかけ、さらに周りの人（大人、ぐみの子+どんぐり２歳児など）への働きかけや関りがどのようなものか？一人一人の育ちを見極めて参ります。

ぐみぐみはうすを拠点にしたぐみ時代を通じて、一人一人の世界を堪能できるような生活環境をぐみぐみの子どもたちとスタッフと一緒に試行錯誤で、一つ一つの石を積み上げていくように創っていきたい、と思っています。

乳児期と幼児期との端境期にある２歳児の世界・・・

イヤイヤ期と呼ばれる２歳児は自分で何もかもやってみたくなる、そんな「やりたい」想いがあちこちで発露する時期です。同時に自分では思うように出来ずに、もどかしさとやりきれない想いで感情を爆発させる時期でもあります。そんな時期だからこそ、以上児の世界に触れる、感じる経験が「やりたい」想いを満たしてくれる場になっていきます。たとえ自分が出来ないにしても・・・。そのため、２歳児は本園の一室に拠点を持つこととしました。生活の中で安心できる拠点を持ちながら、「やりたい」想いが未満児の世界ではとどまらない興味関心の幅を縦横に広げられる環境として、本園生活そのものの「おすそ分け」です。自分の世界を最大限押し広げる中で、以上児が創り出す世界も見てみる、感じてみる、触れてみる、聞いてみる、時には混ざってみる・・・。「やりたい」という想いのままに、そっちの世界に入ってもいいし、入らなくてもいい・・・。自分の世界と以上児たちの集団で創る世界を行き来していい・・・。そんな鬼ごっこで言う「みそっかす」ルールの特権がある時代、それが２歳児のどんぐりさんです。

大人はつい集団への参加を求めがちですが、ここは焦らず、じっくりと一人一人のペースでそうした特権を享受する時間を大事にしたい、と思います。他者と比べず、「あなたのあなたらしさ」を発揮できる世界が集団で創る世界とおのずと重なってくる時まで・・・。そのための仕掛けが年度の後半期の以上児さんの行事の取り組みのプレ体験。取り組みからの過程を丸ごと、見て、聞いて、感じる中で、こんなこともあんなことも「やってみたい」という想い、憧れが芽生え、高まってくる時期です。できる、できないではなく、やってみたいことをやってみる、やってみた・・・という体験と充足感を身体いっぱい貯め込む中で、人とする楽しさ、集団でする醍醐味を身体で感じ取っていきます。

発達的な観点から粗大運動、供応動作や微細運動など年少には及ばない点もあるので、大人が補うことも多々ありますが、言葉のいらないコミュニケーション能力、対人関係の力を伸ばしていくのも以上児の世界に触れるからこそ。他者への興味関心から他者とのやり取りを楽しみ、他者との

関りで出来る喜び、集団でする楽しさ、面白さを見出して、これまでの自分の世界の殻を破る新しい自分に出会います。それが次の段階。年少さんとしての入り口に立つ準備に「結果として」自然になっていきます。

同時に考慮したいのは園生活の時間の長さ。特に前半時期はまだ体力的にも気持ち的にも長時間の本園での生活には無理が生じます。以上児の教育時間と同じ時間帯は本園で過ごしますが、昼食後はぐみぐみはうすで昼寝をし、おやつを食べて午後からの生活環境はぐみぐみはうすの静かな環境をベースに過ごします。もちろん慣れてくれば、個々に午後からも園庭や時には本園のホールにも遊びに出向くこともあるでしょう。

ぐりちゃんところちゃんが混ざるどんぐり組・・・

満 3 歳児入園の子（プチちゃん～旧来の呼称）は年少クラスに編入するのが幼稚園時代、そして幼稚園型認定子ども園の昨年度までのクラス編成でした。ぐみ棟で保育認定の子どもたち、本園年少クラスで教育認定の満３歳入園の子どもたち。同じ２歳児の年齢ですが、生活拠点はそれぞれ別でした。守られたぐみ棟での環境での育ちと以上児の中でその刺激を受けながら生活する育ちの違いが窺え、人間関係の固定化も見えるので、年度後半ではぐみ（２歳）とプチ（満３歳）の交流機会を多く持ってきました。それを幼保連携を期に同一クラスとして本園に拠点を設けたのは、２歳児の育ちの伸びしろとして、以上児の姿、遊びや活動の中身に直接的に振れる経験がやはり非常に大きなファクターになっていることが判ってきたからです。年度当初は少ない満 3 歳入園の子（ころちゃん～新たな呼称　注）も年度後半には増えていきます。保育認定のぐりちゃん（新たな呼称　注）と同じ生活拠点で教育時間を過ごし、お昼寝にぐみ棟に出向くぐりちゃんを尻目に、午後のお帰りまで本園で過ごします。特に上半期は年少クラスに混ざってお帰りのお集まりをする機会が多くなるでしょう。本園生活を一日丸ごと感じる点では旧来のプチちゃんの生活とは変わりません。違うのは年少に混ざっていたプチちゃんに対して、どんぐりにいることでぐりちゃんとは日常的に顔を合わせる毎日。ぐりちゃんに以上児の午後からの生活を伝えて（言葉でなく）いく存在になるといい、と願っています。

年度の後半になってくると、個々により昼寝をしなくなる（したくない）ぐりちゃんが増えてきます。そんな時は午後のお帰りの時間帯をころちゃんと共に年少さんと過ごします。（周りの子に比べうちの子はまだ昼寝をしている、と慌てなくて大丈夫です。）一人一人が必要としている時間を保障しつつ、一日の生活時間の中で徐々に午後の生活もそのまま本園で過ごし、ころちゃんをモデルに午後のお集まりに年少組に加わったり、年度の最後にはどんぐりさん自身のクラスとして「お集まり」を楽しみ、未満児の世界から幼児期の世界への土台を作ります。

（注 どんぐりころころの歌から「ぐり」と「ころ」を採用しました。）

三つの方向目標とステップで・・・

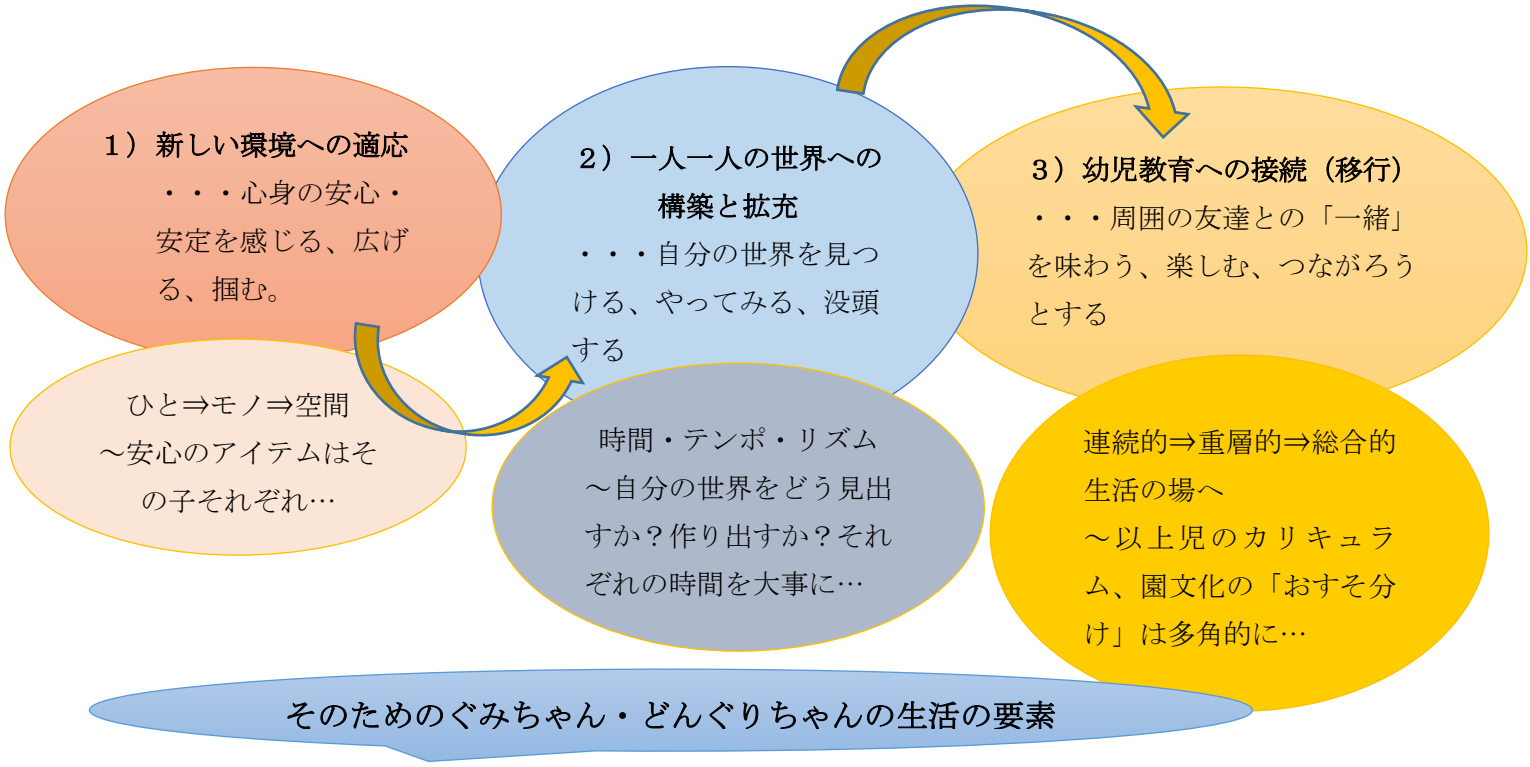
このようなぐみ、どんぐりの未満児時代の育ちの大きな方向目標としては 3 点です。

① **園生活で安心、安定感を獲得すること。**

② **その子らしさの自己発揮できる多様性、可能性を拡げること。**
（未満児ならではの、それぞれの個性ある世界の体現、獲得）

③ **生活の中での多様な自信をつけること。**（身辺自立及び行動する自信、他者とのコミュニケーションを楽しむ自信、環境を切り抜く、変えられる自信等々。）

これらの目標に向けて、三つのステップを経て幼児期からの「遊びの王国」への本園での木の花暮らしの時代に繋いでいこうと思います。



そのためのぐみちゃん・どんぐりちゃんの生活の要素

まとめると、木の花流の未満児保育の基本的な柱は以下のように考えています。

◇連続性のある日常生活（安心領域）と非日常（ちょこっと冒険）の緩やかな体感ができる機会の提供。

・・・・緩やかな繰り返しの日常と共に本園（3 歳以上児）の遊び、生活、行事の取り組み、当日、アフターの様子を体感し、時に見学、一部参加などしながら非日常も緩やかに身近に感じられる生活。

◇家庭との連続性と同時に家庭とは違う多様な体験の用意。

・・・・生活リズムなど家庭との連続性も大事にしつつ、でもちょっと家庭とは異なる（例えばお弁当を持ち寄ってデッキや屋上でみんなで食べるなどの）多様な体験の積み上げができる生活。

◇五感を多様に使いこなし、心身の発達が見通せる生活の場の創造

・・・・園内、園舎、地域（領域は狭いですが）、どんぐりちゃんとの合同時間、保育者、クラス、縦割り（1，2 歳と 1～6 歳）、保護者交流などでの多様な出会いの中で、五感を多様に活用でき、ぐみちゃんたちでより面白く、より楽しい「ぐみぐみはうす」を創造していける生活。

◇一人一人に応じた個別的対応

・・・・0～2 歳の未満児は幼児期以上に月齢や個人による発達差が大きい時代です。一人一人の世界をそれぞれがしっかり気付き（築いて）、堪能できるように、一人一人の成長をゆっくり、じっくりと見守れる生活。

0歳児の受け入れ、そしてどんぐり組（2歳児）の新設、未満児保育としての新展開を迎え、新たなチャレンジの一年になります。0歳からの育ちを6歳まで繋げていく、そのための第一歩は、まずはお家の人とは異なる他者、保育者との信頼関係をしっかり築き、その関係性の上に立つ「安心・安定」感を土台に、それぞれの子がもつ一人一人の伸び行く力を見定め、その子の世界の多様性と可能性を拡げるための新たな未満児保育に、また一歩を踏み出したい、と思います。